

# 井上靖の『孔子』と『論語』

田 梅・邢 永鳳

## 序言

井上靖は日本で、また中国でも名高い作家である。彼の数多くの作品の中には、もっとも注目されているのは中国の歴史から取材した小説である。『孔子』は井上靖が亡くなる前に書き上げた最後の長編小説であり、彼の作品の中で、重要な位置を占めている。この作品は、弟子が師の孔子のことを語る形式を取って、弟子の目に映る孔子を造型した。80歳に達した作者自身には、人生の思索や、世界平和にたいする祈願などを、孔子や、語り手の弟子を通じて、読者に語った。

井上靖は『論語』の魅力に引かれ、『孔子』を書きはじめた。『孔子』の創作には『史記』の孔子世家や列伝、或は『春秋左氏伝』も参考にしたが、主要な古典は『論語』である。

本研究では、井上靖の『孔子』と『論語』の関係について、考察したい。

井上靖について、日本では膨大な研究が行われた。初期から中期にかけて（1977年まで）の書誌的研究は坂入公一『井上靖ノート』（風書房、1978年）。伝記的研究を整備したのは福田宏年である。彼は先に『井上靖の世界』（講談社、1972年）を書き、以後一貫してその生涯と文学の軌跡を追及し、井上没後に『増補井上靖評伝覚』（集英社、1991年）をまとめた。長谷川泉編『井上靖研究』（南窓社、1974年）は、井上靖文学の様式、作品、背景について編集者以下三十人の研究者の論考を集大成したものである。さらに井上靖の死去に前後して、井上ふみ『風のとおり道』（潮出版社、1990年）と『私の夜間飛行』（潮出版社、1993年）、井上卓也『グッドバイ、マイ・ゴッドファーザー』（文芸春秋、1991年）と近親者による三冊の本が出たことも作家の人間の素顔の理解を容易にしている。雑誌論文の類については枚挙にいとまがない。しかし、井上靖の最後の作品である『孔子』を対象とした研究は少ない。徳田進の『日中比較文学上の「孔子」』（ゆまに書房、1991年）は比較文学の角度から『孔子』における『論語』撰取の特色を論じ、また、谷崎潤一郎の『麒麟』との比較により、孔子像には多少触れたものの、全貌に迫らなかった。

中国の歴史に取材した小説を数多く書いた井上靖は、我が国でかなりの名望を集め、その作品が多く紹介された。井上靖を対象とした研究も少なくない。『20世紀日本文学史』（葉潤渠・唐月梅、青島出版社、1998年）の中では、20世紀後半の三人の代表作家の一人として、井上靖が数頁を割いて紹介されている。著者はその生い立ちと文学創作を紹介し、さらに詳しい作品論を展開し、井上の歴史小説、とりわけ中国を題材とする歴史小説の特徴を指摘した。井上文学のみを扱っ

たものである『井上靖文集』三巻（安徽文芸出版社、1998年）では、編集者であり、翻訳も担当した鄭民欽による「井上靖文学の人間性」、「文学孤独中の思索」、「井上靖文学の原型本質」の三篇の解説が収められている。鄭氏は各々の作品論も含めて井上文学を包括的に紹介し、文学と詩との関係を述べて、その歴史小説の手法および特徴を分析して、井上靖文学が持つ通俗性、大衆性はその文学の一大特徴であると指摘した。井上文学の全体像を捉える資料である。井上の中国西域を題材とする歴史小説についての雑誌論文は多く見られるが、今まで『孔子』に関する論文は極少ない<sup>①</sup>。

中国では、孔子は賛否両論の人であった。漢の武帝の時、孔子が神格化され、聖人、世人の仰ぎ従うべき師表として尊ばれていた。二千余年このかた、孔子の説は中国の各時期において、各朝廷政府の政治的需要によって、かなり揺れ動いた。特に現代中国の「新文化運動」と林彪孔子批判運動中、孔子思想は強く批判された。それにもかかわらず、孔子の教えは多大な影響力を持っていて、『論語』は世世を経て衰えることなく、「三人行く時は、必ず我が師あり」とか、「学びて思わざれば、即ち罔し、思うて学ばざれば即ち殆し」などの名言は我々の生活に密接に関わり、今もなお人の思想に強く影響しているのである。孔子はいったいどのような人か、二千五百年も前のその人の言葉はなぜ今になっても影響力があるのかと、孔子を見直し、再評価する必要性をつくづく感じた今日、井上靖の『孔子』は我々が孔子を再認識するいい参考になると思う。井上靖の終篇作品として、『孔子』は井上靖の作品の中で非常に重要な位置を占めていて、「井上文学の中核であり、総決算である」<sup>②</sup>。大病と闘いながら書かれた作品で、『孔子』には作者の全身全霊の打ち込まれた趣がある。『孔子』から人生の老境を迎えた井上なりの人生観、死生観、社会観といったものを窺えるのではなかろうか。中国と日本において、これまでに井上靖に対してかなりの研究が行われたにもかかわらず、『孔子』を対象とした研究はそれほど多くないように見える。

## 一、井上靖の歴史小説と『孔子』

井上靖（1907-1991）は現代日本の名高い作家である。父が軍医で、任地を転々としたため、井上は幼いころ、両親のもとを離れ、祖母の手で育てられた。1950年に『闘牛』で芥川賞を受賞して以来、彼の膨大な作品は現代小説、歴史小説、時代小説、そして詩、紀行文、エッセイ、美術批評など、数多くのジャンルにまたがる。「井上文学の時間、空間は、ほとんど世界の全域に及んで、しかも無限の広がりを持つという他の作家、詩人に見られない魅力を持っている」と評価されている。井上はとくに中国が好きで、前後二十五回にわたって中国を訪問した。長年日中文化交流協会の会長として、中日友好と両国の文化交流の促進に心血を注いだ。

作家としても、生涯中国の古い時代に題材を求め、『漆胡樽』（1950）を始め『異域の人』（1953）、『僧行賀の涙』（1954）、『天平の薨』（1957）、『楼蘭』（1958）、『敦煌』（1959）、『蒼き狼』（1959）、

『狼災記』(1961)、『明妃曲』(1963)、『楊貴妃伝』(1963)、『褒姒の笑い』(1964)など大量の作品を発表した。その中、『天平の薨』が芸術選奨文部大臣賞を、『楼蘭』は『敦煌』と合わせて毎日芸術大賞(1960)を受賞し、『蒼き狼』と『風涛』はそれぞれ『文芸春秋』読者賞(1960)と読売文学賞(1964)の受賞作となった。

『孔子』は井上靖が亡くなる前に書いた最後の長編小説である。井上はずいぶん前から、孔子や『論語』に関心を持ち、六十歳になってから、『論語』の研究を始めた。「『論語』は他の哲学書のように、難しいことは何も書いてないけれども、凄いですしね。いつでも各ページに凄い刀が一本ずつ入っているような感じ<sup>③</sup>」と言い、会議や旅行の際に、常に孔子について話した。「書く」と言ったのは1981年で、その後、十年にわたって準備をしていた。その間に井上靖は『論語』そのものはもとより、司馬遷の『史記』所収の「孔子世家」、「仲尼弟子列伝」、左丘明の著とされる『春秋左氏伝』や『孟子』ほかを深く読み込み、古来の浩瀚な注釈書や研究書にも眼を通した。それに加えて執筆前、連載の最中に六回孔子の事跡を求めるために中国へ取材旅行をした。年齢八十を越した彼は大病と闘いながら見事に『孔子』を完成した。作品が完成した一年余りの後、井上は亡くなった。妻の井上ふみは夫は自分に与えられた「時間」と競争していたと言った。『孔子』は雑誌『新潮』に1987年6月から1989年5月まで、二十四回に亘って連載され、1989年9月に新潮社から刊行された。孔子の架空の弟子蔦薑が師の没後数十年経って、孔子の十四年にわたった中原放浪の旅やその教えを回想する独白形式で小説が進んでいく。『孔子』は刊行されて以来、爆発的な売れ行きを見せ、更に第四十二回野間文芸賞を受賞し、大きな反響を呼んだ。そればかりでなく、『孔子』は中国でも注目を受けた。刊行してまもなく中国で翻訳出版され、いままで十数種類の訳本が出ている。

儒教文化は中国文化の重要な一部である。儒教の開祖として、孔子の名と教えは中国は勿論、その周辺国家にもかなりの影響を及ぼした。古来、政論文の形式で、孔子の思想を述べたものは珍しくないが、小説の形式をもって、孔子を描写したものはごく稀である。日本の文豪である井上靖が、小説の筆を取って、異国の二千余年前の思想家孔子のイメージを作ることは、それ自体、特別な試みである。井上のそうした試みは大きな成功を収め、『孔子』は野間文芸賞を獲得し、ベストセラーとなって、大きな反響を呼び起こした。孔健は「井上靖『孔子』<sup>④</sup>で、「経済大国、経済の近代化の優等生の日本人にとって、「儒教」とは、『論語』とは、何であるか」と「あらためて考えて考え直す糸口」となったと述べた。野口武彦は「文芸時評」<sup>⑤</sup>で『孔子』ブームに興味を示し、「戦後もはや四十五年、その期間をたっぷり生きて来て、それぞれの『天命』に思いを致している年齢層に『孔子』は何か強くアピールする作品」ではないかと述べている。異国の、現在からあまりにも時間的にかけ離れていた孔子の何かが二十一世紀の背景を持つ日本の読者の深い感銘を呼んだのか。

井上の筆による孔子は中国の歴史的記載にある孔子とは同じイメージなのか。それを究明する

のはとても意義のある仕事だと筆者が思う。

## 二、『孔子』に見られる『論語』

孔子はいったいどんな人物だったのだろうか。彼はどんな魅力を持っていたのだろうか。井上靖は『論語』や司馬遷の『史記』の「孔子世家」、「仲尼弟子列伝」などを読みふけりながら、それをもととして文学的虚構を加え、孔子をありありと描き出している。

『論語』は周知の通り、孔子および弟子たちの語録集である。そのなかで、もっとも多く記録されたのが孔子の言行である。そのほか子貢、子路、顔回、子張らの諸弟子のことも記録されている。井上靖は『論語』の魅力に引かれ、『孔子』を書きはじめた。『孔子』の創作には『史記』の孔子世家や列伝、或は『春秋左氏伝』も参考にしたが、主要な古典は『論語』である。『孔子』に引用された『論語』の言葉は徳田進の統計によると、ほぼ106箇所ある。それらの言葉は、孔子の思想に関するものを除けば、主に人物の性格を示す言葉である。井上靖はそれらの言葉をどのように利用し、孔子をイメージをアップしたのか。以下それについて分析していきたい。

『論語』の微子第十八篇には孔子の中原放浪に関する記載がある。作者はその中の一節をそのまま引用して、孔子と周囲の人との対比によって、孔子の偉さを描いた。

天下中がおおきな河に押し流されている。誰も、これに抵抗することも、この流れを変えることもできない。お前さえも、国の権力者をより好みして、あっちに行ったり、こっちに来たりしている、こせこせした人間にくっついていても始まらない。世間を捨てている人間の仲間入りして、畑仕事でもしている方が、まだましだよ。(長沮、桀溺ふたりの隠者)

——この紊れに紊れた世から眼をほかにそらせてはいけない。どんなことがあっても、人間が生き韃っているこの現世から足を外してはいけない。そうではないか、この人という名で呼ばれている輩と共に生きるのではなくて、他の何ものと共に生きようというのであるか。所詮、鳥獣の群れに入ることはできないのだ<sup>6)</sup>。

長沮、桀溺ふたりの隠者は、孔子がむなししい理想主義のために、あくまで改革の意志を貫こうとするのを、また子路が、それに付き従っているのを、批判し、あっさり、人間など思いあきらめてしまえ、といったことに対し、人間こそ私の愛するものである、私たちの努力によって、その人間に道のある時代が来ると孔子は答えた。この言葉は孔子が救国救民の抱負を抱く人であることを語っている。

『論語』には非凡な冷静さが生み出した、孔子自身の言葉が、幾つかある。『孔子』の第四章で、「冷厳極まりない人」としての孔子を具象化した。

怪力乱神を語らず（『論語述而第七』）

子の慎しむ所は斉戦疾。（『論語述而第七』）

怪異、暴力、背徳、神秘、こういったものは一切話題にしなかったという言葉は孔子の冷厳極まりない面を伝えているし、孔子が要心したのは潔斎と、戦争と、疾病の三つであったという言葉は、細心でもあり、大胆でもあり、冷静でもあった孔子の非凡さを伝えている。それから、もう一つの例を挙げてみよう。康子、薬を饋る。拝してこれを受く。曰く、丘、未だ達せず。敢て嘗めず。（『論語郷党第十』）自分がそれについての知識を持っていない限り、いかなる権力者から贈られた薬であろうと、いっさい、薬なるものは口にしない、孔子の冷厳極まりない人柄がここにも浮き彫りにされている。

他者に対するやさしさ救国救民の抱負を持ち、冷厳極まりない孔子の人柄は史実としてよく伝えられていた。それに対して、孔子のやさしさはあまり知られていない。紀元前二世紀、漢の武帝が、儒教を国教とし、孔子を人間の規範として選び定めた。これをきっかけに孔子は聖人と見なされるようになった。『論語』に孔子の人となりに関する記載は少なくないが、これまでの孔子の研究書では、この点は見落とされることが多かった。井上靖は『論語』の中のこれらの言葉を抽出して、孔子が凡人と異なる非凡さを備えるとともに、人間的な一面をあわせ持っていた人物だったことを描いている。

『論語』に記された顔淵の死のことを、『孔子』の中次のように記されている。

『論語』 顔淵死す。子曰わく、噫、天、予れを喪ほせり、天、予れを喪ほせり。

『孔子』では、顔回が身罷ったとき、孔子は「ああ、天、予れを喪ほせり、天、予れを喪ほせり」と、絶句したと伝えられています<sup>7</sup>。

『論語』 顔淵死す。子、之れを哭して慟す。従う者曰わく、慟す有る乎。夫の人のために慟するに非ずして誰が為めにせん。

『孔子』では、顔回が息をひきとった時、孔子は悲しみに耐えかねて、咽び泣きました。その時、そこに居合せた一人が、「声を出してお泣きになりましたね」と、子に告げると、子は始めて自分が慟哭したことに気付いて…（子）自分の場合、この顔回という人のために慟哭するのではなくて、他の誰のために慟哭するでしょう<sup>8</sup>。

『論語』 顔淵死す。門人厚く之れを葬らんと欲す。子曰わく、不可なりと。門人厚く之れを葬る。

『孔子』では：子曰わく、回や予れを視ること、猶お父のごとく也。予れは視ること猶お子のごとくするを得ざる也。我れに非ざる也。回は、この私を父のように思ってくれていたが、私の方は回を己が子のように、葬ってやることはできなかった<sup>9</sup>。

以上の内容で分かるように、井上靖は『論語』の先進第十一の三条をほぼ原文そのまま引用し、顔回の死に遭った孔子の悲哀を隠さずに記述した。顔回は孔子のもっとも信頼する弟子であり、

その死は、孔子の生涯における一大打撃であった。顔回の死に対して孔子の泣き方は異常である。『論語』や『史記』のなかで、孔子の泣く描写は二箇所ある。一つは顔回を失った悲しみに耐えなくて泣いたところである。もう一つは孔子が死ぬ前、期待していた理想的政治がなかなか実現しないことにたいして、「天下道無きこと久し。能く予を宗とする無し」と謂いながら、涙をこぼしたところである。顔回の死を前にした孔子の我を忘れた悲しみは、慟哭なのであった。常に、節度ある行動を尊ぶ孔子としては、めずらしいことであった。しかし、その異常とも言える悲しみ方から、孔子の顔回に対する深い感情がわかる。

以上、『論語』の言葉をほぼそのまま引用した数例から、『孔子』が忠実に『論語』に基づいた作品であることが分かる。井上は孔子を記号化、抽象化しようとせず、史実にもとづいて描いたが、性格を表す言葉を慎重に選び取ることによって、孔子を血の通った人間として描写した。井上は孔子を聖人とは見ず、孔子の偉さを認める一方、孔子の人間的な一面も強調した。

### 三、蔦薑の目から見た孔子

『論語』の簡潔な記述からでも、孔子の人柄や個性豊かな弟子たちの様子などをうかがい知ることとはできるが、小説にする場合は、それらの断片的な話の穴を埋めなければならない。つまり、記録には小説の創作のための仮想の空間が残され、それが作者に豊富な想像の余地を与えているのである。井上靖は『論語』の中の言葉を柱にしなが、それらの言葉が語る春秋、戦国時代といった乱世を歴史的背景として、孔子の放浪の旅に随行した蔦薑が自分の見聞や体験を語るという形で、小説を展開する。蔦薑は井上創作の架空の人物である。蔦薑はどのような人物か、井上は彼を次のように設定した。

私は他の弟子衆とは異なって、途中から何となく子の教団に紛れ込み、そのまま居坐ってしまったような形で、子にお仕えしたものでございます。この国に於いての子の晩年の何年かは、誰に命じられたわけでも、勧められたわけでもなく、勝手に教団の下動きを受待たせて貰って、少しでも暇ができると、なるべく子のお声の聞こえるところに身を置いていようと、ただそれだけのことに気を遣っていた人間でございます。門下生だと申しましたら、子は優しくお笑いになることでありましょうし、他の門下生たちは、多少、それは困るといった顔をなさることでありましょう<sup>99</sup>。

蔦薑が孔子と初めて出遭ったのは、孔子が十四年にもわたる流浪の旅を続けている途上のことである。彼は孔子一行の臨時の従者として共に旅をする間に、しだい孔子に惹かれていき、孔子の弟子の末席に加わるようになった人物である。すなわち、作者は蔦薑を子路、顔回、子貢らの

ような孔門の高弟としてではなく、孔子の身近にあった無名で地位の低い雑用係として設定している。「蔦薑は取りも直さず作者自身である」<sup>④</sup>と福田氏が言っている通り、これは作者自身が孔子のもっとも身近にあった弟子として師を語る物語だとも言えよう。蔦薑の眼にうつった、在りし日の孔子の姿は、そのまま作者が抱く孔子観と重なり合う。『孔子』に於けるこの方法は、作者の孔子観を十分に披瀝していると言える。

『論語』に記載された多くの語録は、一粒一粒、煌めくばかりに哲理が輝く真珠のような言葉である。しかし、孔子はいったいどんな場合に、どういう心境を持ってそれらを語ったのかとの具体的描写はない。その具体的描写こそまさに小説に欠かせないものである。それは『論語』をもとに、小説を創作する井上にとっても、大きな問題であったと思う。井上靖は歴史資料を繰り返して研究した上で、巧みに蔦薑という人物を設定した。蔦薑は孔子の弟子のような存在であり、各事件の経歴者である。蔦薑という虚構人物の登場によって、作者は具体的細部描写を自由に虚構することができるし、ストーリーがスムーズに展開されることになる。

晩年の孔子は相次いで子路、顔回、伯牛の死に遭った。井上は弟子の死に直面した孔子の悲しさを描いて、孔子の弟子への深い親しみを示した。『論語』には孔子の当時の心境を語る記述はない。井上は孔子の心理を分析することによって、孔子の優しさを描いた。

『孔子』では、孔子が「斯の人にして斯の疾有り」と言いながら泣いたとある。『論語』や『史記』の記載によれば、孔子はあまり感情をはっきり出さない人である。『論語』と『史記』にある孔子の泣く記載は二箇所だけある。孔子が病に苦しむ弟子を見て悲しみに耐えず泣いたことは作者の虚構で、孔子の優しさを伝えたかったからだと思われる。また作者は孔子がいつも一人で見舞いに行くのは、老いて重病の床にある伯牛の気持ちを十分配慮するからだと述べている。この描写を通して、孔子の「誰も及ばないお考えの細いところ」を持った優しい人物であったことがよく伺われる。

『孔子』全篇に眼を通せば、上例のほかに、賞賛すべき具体的描写はほかにも沢山ある。もちろん、その生き生きとした具体的描写は『論語』にはみあたらない。作中人物の鮮明なイメージはまさに、井上靖の虚構によるところが大きい。

孔子は乱世の中で、困難に敢えて直面し、社稷振興、生霊救助の大志を持った人である。正史に記されない内面描写を通じて、井上靖は孔子の「誰も及ばないお考えの細いところ」や郷愁など、『論語』に欠けた孔子の人間性を見事に描いたのである。しかも、それらの細部描写は根も葉もない空想ではなく、作者が古文書をよく研究した上で創作した合理的フィクションなのである。

一方、以上のような細部描写は、蔦薑という架空人物を創作したことによって可能になった。彼はいつも孔子のそばに居て、或いは近くから或いは遠くから、時に恐れ、時には、親近感を持ち、他人の知らない孔子の一面を語る。かりに、蔦薑という架空の人物ではなく、直接に孔子と

実在の弟子との対話として『孔子』を書くとしたら、どうなるだろう。それは単に孔子とその弟子との交流の事実を記す史書に近いものになり、孔子の人的魅力を欠き、読者の共感を得ることはできなかったであろう。

『孔子』には、一人称の蔦臺が、孔子が道を求め、その実現のために苦闘し続けることに感動を述べる語句が非常に多い。筆者が統計をとったところ、ほぼ20箇所にはのぼる。議論、評価の内容は主に、師としての孔子、思想家としての孔子、政治家としての孔子、また人間としての孔子に集中している。弟子を深く愛している師孔子は弟子を深く愛しているが、愛情の表現が独特だと蔦臺は思う。

子路への叱責、顔回への労わり、子貢への無視——みな、子の愛情の表現であったと、見るべきかと思います。子の場合は、叱責ですら、無視ですら、愛情であったのであり、こういう所は、子の独自なところであります<sup>12</sup>。

孔子はすべての弟子を平等に扱っている。孔子の豪さ、大きさは、自分の周囲のものに対して、特に誰をとという見方をなさっていないところですが。子路、子貢、顔回という三人の高弟に対しても、あくまでも平等、特に誰をとという見方はなさっておりません。長所、短所みな正確に見ておられます。…一人を特に大きい愛情で包んだり、大きい「発言」を許したりするようなことはありません<sup>13</sup>。

孔子は未曾有の乱世に生きても、猶人間の未来を真剣に考えている。

子ほど醒めた思想家は、子以前にはなかったのではないのでしょうか。「この未曾有の争乱時代にあつては、人間、醒めて生きていく以外、ほかにいかなる生き方もない。そうでなければ、みんな狂うほかない」——このように子はお考えになっていたのであります<sup>14</sup>。

孔子は一連の挫折に遭いながら、絶望することなく、なおも目的に向かって努力し続ける。

子には、我々の言う「絶望」なるものはなかった、——と言うより、あり得なかったと言うべきではないか、と思います。併し、同じ人間である以上、子にしても、一生のうちに一度や二度は、同じ絶望と言ってもいい立場に立つことも、おありだったろうとは思いますが、併し、子にはそれは絶望としては受取れなかったのではないのでしょうか。天命とか、天の試練とか、そうしたものとして、それに対しては、面を上げて耐えておられたに違いありません。こういうところが、子の、われわれ凡人とは違うところかと思えます<sup>15</sup>。

孔子の魅力、孔子の弟子らがどんなに困難な状況にあつても、師から離れることのなかった理由について、蔦臺は次のように考えた。



烈しさと穏やかさ。厳しさと優しさ。温かさと冷たさ。——こうした反対のもの、相反するものが、同居しているというか、一緒になっているというか、そうした状態にある魅力。子の傍に居て、この独特のゆたかさを知ってしまうと、子から離れることはできなくなってしまう。それから、また、山のような教養、海のような才能…<sup>⑥</sup>

『論語』は孔子と其の弟子たちの語録集である。以上のような孔子に関する議論と評価は、『論語』にはもとよりない。『史記』は史書である。司馬遷は孔子の生まれから死ぬまでの生い立ちを史的に記載することにだけ関心があり、直接に孔子を評価することはしなかった。それに対して、文学作品の場合、孔子という人物を形作るのに、この話はどうしても必要なものである。井上は一人称の蔦蕘を通して、孔子を客観的に描写すると同時に、蔦蕘に託して、自己認識した孔子を語るのである。したがって、これらの話は作者の心に生きた孔子像を十分披瀝する資料でもある。蔦蕘の役割については徳田進も次のように注意をうながしている。

井上靖は孔子を描くのに蔦蕘の立場を借りている。…蔦蕘の孔子についての感動は、孔子の言行や弟子たちへの教導、或いは自然に接する態度、さては激動してゆく社会への応接などに織り交ぜて語られていく<sup>⑦</sup>。

師としての孔子は弟子を深く愛して、平等に取り扱った優しい人である。思想家としての孔子は現世がどんなにひどくてもなお真剣に人間の未来について考えていた。政治家としての孔子は如何なる困難に遭っても、絶望することなく、目標に向けて努力しつづけた。弟子たちは孔子の「山のような教養、海のような才能」に触れると、その魅力に引き付けられ、一生孔子から離れることはしない。作者にとっては、このような孔子は「絶対であります。何事に於いても、子がお間違いになることがあろう筈はありません」という存在だったのである。

総じて言えば、井上靖は孔子の身の回りの世話をする、通常の弟子よりも身分の低い蔦蕘を虚構し、彼に、孔子及びその思想を語らせる方法で神ではない、人間孔子を造型したのである。井上は『論語』から、人物の性格を示した内容を選び取った上で、語り手の蔦蕘の視点から、具体的描写を展開して、孔子の優しさ、救国救民の抱負、冷静極まりない人柄などの資質を描いた。また、井上は孔子を論じ評価し、感動する蔦蕘の言葉を借りて、優しい師であり、醒めた思想家であり、諦めない政治家である孔子像を浮き彫りにしたのである。

## 終りに

孔子の思想を研究するには、その言行録『論語』を対象とするのが当然である。井上靖の孔子への関心は『論語』への関心とも言い換えられる。彼は『孔子』を書く理由を『作家の透視図』

で次のように述べている。

六十代になってから何かの機会に『論語』を読み出したら、非常に面白いんです。『論語』というのは、人生の決算期に近づいている人間が読みますと非常に面白い。全部思い当たる。一つ一つ納得するんです。人生というものはどういうものか、その本質に触れた詞が『論語』のなかに詰め込まれているということでしょうか<sup>8</sup>。

井上靖は『論語』から、孔子を理解、『論語』をもとにして、孔子を書き上げたものであるといえよう。

井上は『論語』を依拠して、どういう孔子像を作り上げたのか、この孔子から今の世界へ何を伝えようとしているのか、これらは将来の課題にしたい。

### 〔参考・引用文献〕

- ①管見の限りでは、「井上靖の『孔子』と曲春禮の『孔子伝』について」の一篇しかない。于長敏：「井上靖の『孔子』と曲春禮の『孔子伝』について」、『第四回日本学中日シンポジウム論文集』、北京日本学研究中心、1993年2月、171-176ページ。この論文は比較文学の角度から、両者の仕組み、内容、作者の創作動機などの相違点と共通点を考察した。
- ②長谷川泉「井上靖文学の魅力」、『国文学解釈と鑑賞』、1987年12月、14ページ。
- ③大江健三郎、井上靖「孔子」について、『新潮』、1998年11月、275ページ。
- ④孔健「井上靖『孔子』」、『週刊文春』、1989年11月2日、25ページ
- ⑤野口武彦「文芸時評」、『読売新聞』、1989年11月24日夕、12版。
- ⑥井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、86-87ページ。
- ⑦井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、204ページ
- ⑧井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、204ページ
- ⑨井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、228ページ
- ⑩井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、11-12ページ
- ⑪福田宏年「戦い取った死」、『増補井上靖評伝覚』、集英社、1991年、323ページ
- ⑫井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、385ページ
- ⑬井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、385ページ
- ⑭井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、334ページ
- ⑮井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、273ページ
- ⑯井上靖『孔子』、新潮文庫、1997年、340ページ
- ⑰徳田進「井上靖の『孔子』における『論語』の撰取の特色」、日中比較文学上の『孔子』、ゆまに書房、1991年、2ページ
- ⑱鈴木健次「作家の透視図」、『鈴木健次インタビュー集』、メディアパル、1991年9月、213ページ

追記：この論文は山東省社科基金の助成プログラム『現代日本文学における孔子像』(10 CWXJ17)の研究成果の一部である。

(田梅：山口大学留学生センター教授 邢永鳳：山東大学外国語学院副教授)